

## 文学博士三上次男君の「金史研究」に対する授賞審査要旨

三上次男君の「金史研究」は三冊から成り、西暦十二世紀の初めから十三世紀の前半にかけて中国の東北部に雄飛した金国の歴史を、政治・経済・制度・民族問題・文化など種々の側面から研究し、これを集成した業績で、著者が昭和八年に着手して以来、長年にわたって研究した成果をまとめたものである。

第一冊「金代女真社会の研究」（昭和四十七年）は三篇に分かれており、著者はまず第一篇「完顔阿骨打の経略と金国の成立」において、太祖阿骨打が完顔部から起って生女真諸部を統一し、国号を金と定めて皇帝の位につき、南方に進出し、遼の勢力と衝突して遼に従っていた係遼籍女真を自己の傘下に統一した過程を解明し、第二篇「猛安謀克制度の研究」では、前半を通論として、最も特色のあるこの制度について、本来女真人部族の軍事組織であった猛安謀克が、金国において軍事組織であると共に行政組織として発展したこと、女真戸の華北地方への大移住の後に、猛安謀克の組織が次第に変質して貧困化・惰弱化の傾向が強まり、この制度が遂に崩壊するに至る変遷の過程を辿っており、後半を各論として、猛安謀克の官吏としての性格、——即ち地位、任務、叙任、免官、承襲、給与、統属関係その他の特質、——を考え、猛安謀克部の社会的構造、——即ち成員の民族的関係、構成、土地の給与、科税および科差、部内の行政、——を論じ、次いで軍事組織としての猛安謀克制度、——即ち金軍の中心をなしたその軍兵の活動と常備軍の編成、部隊統率者としての猛安謀克、謀克の配下の部隊組織、徴兵および募兵、給与と退官後の優

遇規定、皇室に直屬する合扎猛安謀克など——を取扱い、また猛安謀克戸の居住地と戸口、猛安謀克部の名称としての冠称、居住地と冠称との關係を論じている。そして第三篇を「金代初期の部族統制制度」と題して、係遼籍女真の大酋長の帯びた一種の称号であった太蠻、はじめ女真の小部族の酋長を意味していたが後に榮爵に変質した字輩、について考察し、金初に一時設けられていた特殊な地方長官としての世襲万户、過渡的な地方制度であった都統司・軍帥司の性格を考え、また金の北辺にあった蒲与路の位置を考定している。

第二冊「金代政治制度の研究」（昭和四十五年）では、著者はまずこの研究の「一、意義と方法」とを論じて特に各種史料の性格を考察し、金史百官志にみえる官制の制定年代を解明している。次いで主要課題として「二、金代における政務統一機關の研究」を取りあげ、建国以前の政治の中樞機關としての勃極烈と国相、建国当初の勃極烈制度とその沿革、天会十二年（西暦一一三四年）の官制改革に続く勃極烈制度の廃止と中国風の尚書・中書・門下三省制度の發展をたどり、三省それぞれの沿革・組織・権限、三省相互の關係、三省制度の推移、政治史的にみたこの制度の考察を行い、続いて中書・門下兩省が廃止されて後の中樞機關としての尚書省の機能・実権の変遷などを詳細に説明し、次いで金と宋との間の緩衝勢力であった齊国を廃止してその地に設けた行臺尚書省とこれをめぐる諸問題を取扱っている。そして「三、中央監察機關の研究」として、御史台について考察し、本来は中国の制度に由来するこの機關の性格と金朝の各時期を通じての変遷を明らかにしている。

第三冊「金代政治・社会の研究」（昭和四十八年）は四篇に分かれる。第一篇「金室の女真統一と中央權力の形成」において、著者はまず金室完顔家の始祖説話を分析し、完顔家とその祖先を高句麗・渤海と結びつけることによ

って、自家を權威づけて統一を促進したことを論じ、次いで完顔家には建国以前から一定の通婚家が定まっていたことの協力の下に勢力を拡大し、建国以後にもこれらの外戚家が高い社会的地位と大きな政治勢力を持っていたことを実証し、また金初に新しい占領地方に設置した路の制度の実態を解明している。第二篇「金朝における女真社会の諸問題」では、金初の勃極烈に論を起し、金代中期になって移住女真人の多くが生活環境の変化や政治・経済状況の悪化のために窮乏に陥り、第五代の皇帝世宗が大規模な救済策をとったこと、貧窮化と併行して女真人がその特質であった強勁な精神を失って弱体化してきたので、世宗が先頭に立って女真文化の作興に努めたが、その成果が上がらなかったこと、金の行った科挙制度の変遷、漢人の官僚としての任用、ならびに女真人のための女真進士科について論述している。第三篇「金朝における漢人支配の諸形態」においては、金朝前期に女真人の支配領域が拡大するにつれて漢人支配の形態が変化していった状況、漢人個々の頭髮の形や服装をやめて女真人のそれに従うことを命じた改俗令とその変遷、この強圧政策が不成功に終わった顛末を述べ、また世宗時代以降の漢人官僚の地位その他を論じている。第四篇「金と高麗との関係」では、まず高麗の顯宗朝に行われた女真諸族との交易ならびに高麗の契丹対策について述べ、次いで金と高麗との国境をなす鴨綠江下流の要衝の領有問題と、これに関する外交交渉の過程で金の勢力が伸展して行く有様、高麗の仁宗朝に高麗が金に服属する度合の強まるのに応じて、高麗と宋との修好関係が稀薄になって行った事実を明らかにしている。

右に要約した三上君の研究は、関係史料を余すところなく精査して、金朝の歴史を多角的に研究し、中国東北部における北方民族の支配した所謂「征服王朝」の性格とその興亡の歴史を闡明して、重要な貢献をなすものである。